

「楚囚之詩」

雜感 一二三三

高橋 渡

一 詩集の出現

余は遂に一詩を作り上げました。大胆にも是れを書肆の手に渡して知己及び文学に志ある江湖の諸兄に頒たんとまでは決心しましたが、実の処躊躇しました。余は実に多年斯の如き者を作らんことを心に寄せて居ました。が然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば今日までは黙過して居たのです。

或時は翻訳して見たり、又た或時は自作して見たり、いろいろに試みますが、(ママ)底事此の篇位の者です。然るに近頃文学社界に新体詩とか変体詩とかの議論がかまびす囂しく起りまして、勇氣ある文学家は手に唾して此大革命をやつてのけんと奮発され数多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激励したのです。是れが余をして文学世界に歩み寄らしめた者です。

これは叙事詩「楚囚之詩」の自序の前半で、時に北村透谷は二十歳、明治二十二年のことである。詩集は四月九日に春祥堂から刊行されている。

当時の口語表現の水準からはるかに突出したこの文体には、作品完成にいたる道程とともに、透谷にとって初めての作品、その完成の喜びが表出されている。「遂に一詩を」と記した時、透谷には先行する叙事詩、湯浅半月「十二の石塚」(18年)、落合直文「孝女白菊の歌」(21、22年)とは全く異質な世界を、詩想、表現の両面から形象した満足感、自負があったに違いない。「新体詩抄」(15年)以降の新体詩興隆の潮流を眼前にしなが、詩人として「文学世界」に参入できた喜びも。しかし、自負には「躊躇しました」という、時代の文学状況と隔絶したことへの詩人自身の疑心、不安もあったのである。時代に先例のない思想的叙事詩であってみれば当然のことである。かつてない文体としての個性的な詩型を生み、語り手であり主人公である「余」の楚囚としての暗黒意識、獄中死の受容によって自己定立を図る個我意識という詩想を構想したのであるが、措辞についてまわる生硬さとともに、心情の詩的発酵の希薄さも意識されたであろう。構想、さらには構成への自省もあったかもしれない。これらが、日記に記されているように発行直後の破棄処分となった原因かもしれない。

それはそれとして、「翻訳して見たり」の文言には、後に「三日幻境」(25年)で透谷の言う苦獄、牢獄という暗黒意識とみごとに対応し、透谷に表現の方向性や方法を啓示したバイロンの「シオンの囚人」などが含まれていよう。彼はこれを徹底して読み、そこに自身の内面を発見したに違いない。そして、自分と等価な思想や感情を見出すとこれを翻訳し、詩作を意思する人間の血肉としたのであろう。二十歳の青年、彼のみならず時代の表現の現況からみて未踏の世界、「楚囚之詩」に「シオンの囚人」との類似性の多いのは当然のこと、今日の剽窃とか模倣とは次元が異なるう。ところで、その「楚囚之詩」とはどんな作品だろう。次に第一、第二節を引用してみよう。

第一

曾つて誤つて法を破り

政治の罪人つみびととして捕はれたり、

余と生死を誓ひし壮士等の

数多あるうちに余は其首領なり、

中に、余が最愛の

まだ蕾の花なる少女も、

国の為とて諸共に

この花婿も花嫁も。

第二

余が髪は何時の間にか伸びていと長し、
前額を蓋ひ眼を遮りていと重し、

肉は落ち骨出で胸は常に枯れ、

沈み、萎れ、縮み、あゝ物憂し、

歳月を重ねし故にあらず、

又た疾病に苦む為ならず、

浦島が帰郷の其れにも

はて似付かふもあらず、

余が口は涸れたり、余が眼は凹し、

曾つて世を動かす弁論をなせし此口も、

曾つて万古を通貫したるこの活眼も、

はや今は口は腐れたる空気を呼吸し

眼は限られたる暗き壁を睥睨し

且つ我腕は曲り、足は撓ゆめり、

嗚呼楚囚！世の太陽はいと遠し！

噫此は何の科ぞや？

ただ国の前途を計りてなり！

噫此は何の結果ぞや？

此世の民に尽したればなり！

去れど独り余ならず、

吾が祖父は骨を戦野に暴せり、

吾が父も国のために生命を捨たり、

余が代には楚囚となりて、

とこしなへに母に離るなり。

漢文訓読体、自由詩型の叙事詩の出現に、当時の読者はどう反応しただろうか。その一つに「女学雑誌」記者の「十六章を通読するに、気骨、想像、愛思、三つ共に凡ならず見ゆれど、律詩として評する時は不幸にも敬服する能はず」がある。「律詩として……」という把握は当然のことで、それだけ、表現は斬新、革命的とも或は異端とも言えよう。例えば、好評だった湯浅半月「十二の石塚」、この旧約聖書研究の詩的精華である作品は序文で植村正久が「日本ニハ未タ其類ヲ見サル史詩ナリ其体制新創ナルノミナラス……」と讃嘆しているが、詩語は温雅な雅語、時に破調はあるものの五七調の詩型である。また、落合直文「孝女白菊の歌」は朗誦を意図したかに流麗で

阿蘇の山里、秋ふけて。なかめさひしき、夕まくれ。

いつこの寺の、鐘ならむ。諸行無常と、つけわたる。

に始まる抒情的叙事詩である。圈点を省き、ゴマ点は今日の読点に改めての引用であるが、いかにも国文学者、歌人らしい伝統的な雅語による七五調は流麗である。これらの伝統的な雅語による五七、七五調の韻律に慣れた読者にとっての違和感は予想外に深刻だったのだろう。

曾³つて誤⁵つて法³を破³り / 政治⁴の罪人⁷として捕⁶はれたり

の韻律、その上、当時の新体詩、例えば美妙山田武太郎編「新体詞選」(19年)などにも殆どみられない漢語、それも「政治・生死・壮士・首領」など当時の韻文学界での非文学言語が多用され、両者は相まって生硬、詰屈な印象を一般には与えたのであろう。

もとより透谷は新体詩の概念からみれば〈詩〉でないことを承知している。自序の後半には「是は吾国語の所謂歌でも詩でもありません。寧ろ小説に似て居るのです。」の文言がある。先行作品のように伝統的な定型、雅語によって発想するには、透谷の内部は複雑にすぎ、自我の意識は過剰なまでに重層し、輻輳していたに違いない。それが、敢て、かかる詩語、詩型を選ばせ、口語詩に近接する文語自由詩に己の詩想を賭けたのである。詩表現の時代的未熟さ、表現と詩想の落差を承知で、いわば冒険、実験に臨んだといえる。しかも、第一節を書きはじめた時に、主人公「余」の設定をめぐって、書き手としての透谷自身の発想に振幅があって、視座の定まらないもどかしさを痛感もし、書いては更に表現と詩想との段差、落差を感じたことだろう。この苦い思いは詩作の全過程を通じて想像できるが、透谷はそれを超えるべく、詩作の行為に真摯である。

苦渋にみちた筆をいかに運んだか、第一、二節で考えてみよう。引用文は岩波版全集で、白ゴマ点は今日の読点に直してある。透谷は国事犯としての楚囚の憤怒を描きたいかのようにあり、「余」の獄中意識は鮮烈で、「噫此は何の科ぞや? / たゞ国の前途を計りてなり!」と、「己を捕えた国家権力への抵抗意識は鋭い。また、「余が代には楚囚となりて、 / とこしなへに母に離るなり。」と、国家との一体感に生きた祖父や父の時代と違って、国家、国家権力と敵対

関係を強いられ、罪なくして楚囚となり、母なる自由を奪われた「余」はその現在を痛哭している。この楚囚の強いられた受苦を表現したいようである。しかし、「誤つて法を破り」という認識が冒頭にある。この認識は「国の前途を計り」、「民に尽し」て、その代償に「太陽・母」という人間存在の根源である自由を奪われた楚囚から生まれる筈がない。とはいえ、「誤つて」と表現しているのである。この「誤つて」には、語り手「余」でなく、書き手透谷の認識が混入しているのだろう。とともに、まだ揺らぎ続ける作品の意図の一端を予測させるばかりか、発想の振幅を予想させるものがある。そうでなければ、冒頭に「誤つて法を破り」という表現は必要なかろう。透谷の筆は苦渋に満ちている。

次は、主人公「余」の設定に揺らぎのあることである。「誤つて」に関連するが、第二節に描かれる壮士像から、この認識は生まれない。この二節を通して「余」に投影している人物は、獄舎にいた大阪事件の大井憲太郎、或いは婚約関係にあった小林樟雄・景山英子であろう。これらの人物と「誤つて」の認識は結びつかず、作品の意図だけでなく、語り手であり主人公である「余」の設定を巡ってもその視座をゆるがし続けさせ、思わぬところで「余」に透谷自身を投影させたのである。第五節以降、「余」には蒼海大矢正夫が重なり透谷その人が色濃く重なって展開する。そして、第九節において、花嫁や壮士との国権による作為的な隔離策による連帯感、共生意識の喪失、さらには絶望と孤独、空無感にひしがれるところから、「余」には透谷その人が濃厚に投影し、己の詩化、自己劇化の様相は深まっていくのである。と同時に、発想も定着し、「余」の目は透谷らしい内観的傾向を示しながら「世界の音信」おとずれ、即ち自由への悲願を深めている。かかる「余」のゆらぎをみても、自我意識の烈しい透谷の、思想という内部世界、観念世界を叙事詩に表現する苦闘のあとが歴然としている。

とにかく、新体詩、叙事詩の新しい時代の流れにあって、潮流と全く異質な文体で、これまた希有な牢獄意識を表出し、最終的には獄中死の受容による生の回復というドラマティックな主題の提示に終わる全十六節からなる、当時の文学常識からみれば非詩とも言われかねない、透谷という個性の精神状況を濃密に湛えている「楚囚之詩」が出現したのである。

二 詩集の背景

「楚囚之詩」には、内部にこもる暗黒な意識の振幅に作動されながら、その暗さに対応する表現を発見しかけた透谷の処女作という側面がある。その発見には少年期から二十歳の現在にかけての精神彷徨、彼が後年「三日幻境」（25年）でいう『過去の七年、我が為には一種の牢獄にてありしなり、』の牢獄、苦獄の意識が参与している。この意識は「余」の造形、その楚囚意識の形象化に反映しているばかりか、詩想にふさわしい詩語への苦闘にも作用しているのである。

この牢獄意識とは、発覚後には大阪事件とよばれる、自由民権左派による渡韓計画、その軍資金集めのための強盗への盟友大矢正夫の勧誘を断った結果の、深刻な自責の意識である。

透谷は十七年一月に神田の静修館で出会い、五歳年長の大矢の加波山事件にも参加しようとしたような先鋭な政治意識にひかれながらも、漢学に造詣もあり漢詩を嗜む、潔癖な倫理家といわれる人間大矢に魅せられたのだろう。その夏、脚気療養をかねて小学教師をしている彼を富士登山の途次に川口村に尋ね、その初冬から翌春にかけては大矢、秋山国三郎との共同生活を川口村の秋山邸で営んでいる。これを透谷は希望の里、「幻境」と後に回顧している。政治的人間が大矢の本領であろうが、透谷にとっては自由民権運動という政治面だけでなく、人生の先達、師表という認識があったらしい。これは「父快蔵宛書簡」（20年）の「嬢は実に第二の大矢なり。」の文脈、文言から考えることであるが、その大矢から秘密計画の全貌を告げられ、資金のための強盗を勧誘されたのである。大矢は当時の壮士一般、渡韓計画の指導者の一人である磯山清兵衛らのように「大功は細瑾を顧りみず」の粗雑な倫理観の持主ではない。大井憲太郎や磯山らに要請されて強盗を決意するまでの煩悶は三日にわたって激しく、「大矢正夫自徐伝」^(ママ)に詳しい。最終的には明治人らしい「国家に貢献」という大義に己を納得させるのだった。その大矢の窮余の誘いを剃髪して断わったのである。透谷は直感で何をとらえ、どれだけの判断力をはたらかせたかは分からない。早熟とはいえ十六歳の少年、渡韓計画にみられる粗雑さ、独善さを透視できる筈はない。壮士気質とその言動への違和感はすでに育っていたらしいが、それが原因

とも思えない。この辺の消息を巡って桶谷秀昭は「北村透谷」で卓見を述べている。「透谷は自分の直観を疑った。それはひょっとすると自分の臆病から来ているのではないか。疑うべきは、ずさんな投機的な渡韓計画や壮士の放縦よりは、事に臨んで狐疑逡巡する自分という人間的性質の方ではないのか。陽明学に惹かれてもいた透谷が、大矢という信ずべき人間とともに、事の成否はどうであれ、事に殉ずるパトスの発動に、人間の美しい生き方を思わなかったわけではない。しかし、結局、透谷は大矢の勧誘をしりぞけた。」

この大矢との訣別を透谷は「我が懐疑の所見朋友を失ひしによりて大いに増進し、この後幾多の苦獄を経歴したるは又た是非もなし。」(三日幻境)と後に記すが、自己に向ける疑惑は深まり、自己への疑惑は暗黒なる情動を惹起して己を責めるだけでなく、思念、思考に下降意識を与えるのである。この精神の彷徨には出口はなく閉塞感がつのるばかりで、その苦悶煩悶は大矢に対しても、断った自分自身に対しても罪の意識を加え、「牢獄・苦獄」という酷薄な情況に己の内部を晒し、風化させることなく持続しているのである。

この体験が透谷に「楚囚之詩」を発想させる有力な動因であろう。このような苦渋にみちた体験がなかったら、帝国憲法の発布、大赦令による国事犯の釈放、大矢を除く大阪事件の関係者釈放という外的動因があったとしてこの作品が発想されるわけはあるまい。自責の思いでせぐりあげる「牢獄・苦獄」の重圧があればこそ、第九節以降の「余」の内観的な目も生まれ、二十歳の透谷にあれだけの深淵をのぞかせ、獄中死の受容を発想させたのであろう。

次は「誤つて法を破り」の認識にかかわる背景である。これは既に解決済みと言ってよく、政治と文学の視点からの研究者たちは、これを民権運動からの離脱による政治的思想的な退行とみる。その視点から自由な研究者はさほど深い意味を認めていない。例えば、橋詰静子、卓抜な「透谷詩考」の著者もそうである。「法の側から見ると誤りであった」くらいに解するがよいと言う。しかし、多くの学説に接しても、先述の疑念が残る。これは研究的疑念というよりは、一個の表現者としての経験的なものかもしれない。少しく、その疑念を追ってみたい。

その根幹については先に述べたのであるが、第一、二節の「余」の認識とは考えられない。あれだけ激しく抵抗意識を権力にいだく壮士、その首領が「誤つて法を破り」と罪を認める筈がない。とすれば、これは語り手の「余」の認識

でなく、書き手の「透谷」の認識ということになるのは、既述の通りである。第三節は獄舎を描き、奔放不羈、民権運動に携わった「余」と四人の壮士を描いて、現在の非人間的な獄舎の抑圧ぶりを語っている。その冒頭に、

獄舎！^{ひとや} つたなくも余が迷入れる獄舎は、

二重^{ふたえ}の壁にて世界と隔たれり

の表現がある。この「つたなくも余が迷入れる」の措辞にこもる認識は、「誤つて」と呼応するものではあるまいか。この節の「余」は第一、第二節と同じ国事犯という確信犯である。その「余」が入獄を「つたなくも不運にも」と認識することはある。しかし、「迷入れる」と連動すれば「愚かにも・見苦しくも」の意味になるので、このような認識を示す筈はない。これも語り手にして主人公「余」ではなく、書き手「透谷」の認識が混入したものと考えざるをえない。

混入と言ったが、そうとしか言いようがない。若い詩人が自己の文体を求め、内部深くで不定型に湧く思想の表出を図ることは難しい。想が多様に振幅して定立化に向かうより、迷路をたどって複雑化に向かい、モチーフが入組んで作品としての統一性を阻み、夾雑物が混入しやすい。しかし、その混入物は詩想の展開、文脈においては混入物であるが、作品を最終的に統合する主題からみれば、それは、主題の美しい破片ということもある。詩法の知識が一般化し、実験的な長篇詩も多くみられる今日においても、そうである。まして、先蹤をヨーロッパに求めるしかない、透谷の時代である。二十歳の青年の表現、それも〈創始〉の名がふさわしい思想的叙事詩の表現に整合性を欠くものがあり、夾雑物の混入するのは止むをえない。透谷は主人公「余」の設定すら表現の過程でその揺れを鎮め、「余」の像を確立していく。そして、「余」に自己の内面を凝視する目、即ち、内観の目を第九節以降にいだかせ得た時、主題が見えてきたらしく、起伏激しく掉尾の第十六節に向かって揺るがない。「誤つて」はこの道程における、結果としての主題の美しい破片であり、若書きの作品に避けられない表現過程の様相を示したものである。

「余」の楚囚としての牢獄意識、その閉塞感、空無感には大矢正夫との訣別以降の透谷の牢獄、苦獄意識の投影のある

ことは既にみてきたところである。彼の民権運動への関心は、その挫折や壮士批判を経ながらも続いている。その彼に、民権運動への参与によって犯した過失について述べた手記がある。後に結婚する石坂ミナとの恋愛を断念しつつなお恋情の熄まない日に書いた「(北村門太郎の)一生中最も惨憺たる一週間」(20年)で、これはミナを通して啓示されていたキリスト教への回心の日か、翌日のものと言われる。次のように自己批判を述べるのである。

「余は明治二十年八月廿一日迄は不信心者の一人なり。復た余は曾って社界を罵つて止まざる者なり。徳法道義を輕蔑して足下に踏付け居たる者なり。復た余は実に数多の婦人を苦しめて自ら以て快しとしたる者なり。」と。この回心による自己批判は、民権運動に向けることなく、運動に参加した自己の言動そのものを省察、批判するのである。これは「父快蔵宛書簡」(20年)の「嗚呼危かりし、此不信心は殆んど生の貴重なる生命を覆没せんとしたり、」に対応するもので、回心による再生を、前者は「記憶せんが為」という精神の記録を自身に刻印するものであり、後者は父なる重い存在に対しての告白、懺悔である。

この回心による人間透谷の自己批判から自己発見の体験が「誤つて」の認識を生み、「つたなくも余が迷入れる」の情念を生んだものであろう。そして、この認識は表現の過程で曳航されつづけ、大矢との訣別による牢獄・苦獄の意識と複合し、絶えず詩想を、或は外延の想のなかに浮遊させては表現を求め、詩化への方法の模索を強い続けたものと思われる。しかし、透谷は救い上げる方法も構想力もまだなく、あのような形で混入したのだろう。そして、これを最終的に表現として透谷が認めたのは、特に第十四節以降の表現が定着したと深い関係があろう。第十四節で第十一、十二節の蝙蝠につづいての鶯の来訪を設定し、

鶯は余が幽霊の姿を振り向きて

飛び去らんとはなさずして

再び歌ひ出でたる声のすゞしさ!

余が幾年月の鬱うさを払ひて。

卿おんみの美しくしき衣は神の恵みなる、

卿の美しくしき調子も神の恵みなる、

卿がこの獄舎に足を留めるのも

また神の……是こは余に与めぐみふる恵なる、

と、神との出会いを感謝し、「自由、高尚、美妙」なる妻・花嫁の化身を鶯にみる詩想を開示し得、「余」を揺るぎなくも自己の分身、いな、自己自身として定立しおおせたからのことであろう。これが第十五節の鶯の飛去による獄中死の受容という精神の地獄をバネにして第十六節の偶然の出来事、「大赦の大慈めぐみ」によるとはいえ、自由への願望はかなえられ、詩人として出発という自己確立を果たしている。これによって、表現のゴリ押し、曖昧性の不満はあるものの、更には、モチーフの一つを表現しおおせない己の構想力をもどかしく思いながらも、透谷は「誤つて法を破り」を主題の破片として最終的に残したのである。

そこまで「誤つて」にこだわったと思われる背景をこのように推測したのであるが、透谷の過去への批判と全否定、そして回心にはミナとの恋愛と断念が深くかかわっている。彼は二十年六月、投機的な商業に失敗し、「生は我が未だ狂せざるを怪しむのみ、白痴とならざるを奇とするのみ。」（父快藏宛書簡）という生の極限に晒されている。これは商人として生きようとした結果でなく、「激烈なる企図を以て激烈なる全敗を取回へさん」という己の過去を〈全敗〉とする熾烈な否定の意識で行動した結果である。このような情況のもとに現れたのが、ミナである。二年ぶりの再会である彼女は、アメリカに亡命した親友石坂公歴の姉、民権運動の重鎮石坂昌孝の長女、自身は敬虔な横浜教会の信徒であり横浜共立女学校の生徒である。そのミナには父の決めた婚約者がいたものの、二人には恋情が生まれ、八月には激しい恋愛感情が互いに湧く。しかし、透谷は躁鬱気質で脳に持病があり、自己を「凡夫の一疾病者、敗余の一兵卒」とかたくなに規制し、「榮譽ある一婦人、真神の庭に成長する」ミナとの懸隔を思い、求愛と断念の相剋に苦悶し、精神の苦獄のはてに「身を下等社会の巢中に隠す可し」（惨澹たる一週間）と、断念するのである。その人間に魅了され、信仰心に

魅せられ、教養にひかれながらの断念の過程には、いかにも内省的で観念的な透谷らしい禁欲的な自己規制がはたらい
ているだけに、内部の震動は限らない。彼は手記をしたため、手紙を父に書くしか方法はなく、六月につぐ生の極限に
晒され、桶谷秀昭（近代の奈落）がいみじくも言う〈情況の奈落〉に降下したのである。

回心は、この生の極限における奈落という空無、絶望、孤独のただなかにおいてなされたところに留意したい。彼は
ミナとの恋愛を意志的、禁欲的に断念した時、「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し、神に帰依す可きを発悟せ
り、」（父快蔵宛書簡）と回心に触れているが、この断念と回心の間には恋情はなお熄んでいないのであってみれば、単
純化して言うなら、理性と感性の乖離は彼に悶絶をよび、十八歳の自己凝視は現実の生にこだわる己の現在を発見させ、
自力というものの弱さ、頼ることの心の貧しさを痛感させ、現世的な自己の放棄に傾いたのである。その時、「人生の正
路を取って進む」（父宛書簡）というミナとの別離の折の誓いが蘇りもしたのでろう。透谷は「これより欲の世界を離れ、
真の神の国に遊ぶを待つのみなり、」とも述べているが、断交の代償が回心へという短絡的な経路でなく、生の極限に立
たされての回心、キリスト教による超脱の意志が回心となったのである。そして、その結果に前述した自己批判、過去
への重い省察が生まれもしたのである。

かかる精神の情況における回心、回心に基づく「社界を罵って止まざる者なり、其徳法道義を軽蔑して……」の省察
であってみれば、詩作にあたって発想の段階から内面深く蘇り、これが作品のモチーフとして作者を刺激したことは疑
えない。残念ながら透谷にはこれらを統合する構想力はまだなかったのである。これには時代の表現力が個人の能力以
上に作用するという面もあり、「楚囚之詩」に完成、結晶という豊饒さをもたらさなかったのである。橋詰静子に倣って
言うなら、「誤つて法を破り」を「国権に抗ったが、いくつかの誤りをわが言動・内部に招き」と解釈し、透谷の無念の
思いを鎮めたい。

三 主題を巡って

「楚囚之詩」を政治と文学という視点から小田切秀雄は「腐れたる 現実に絶望的に対立していた精神と、それがようやく自己の表現と解放を詩のなかに見出しはじめている動きとが、この長篇詩を特色づけていた。」と言う。透谷研究の戦後の第一段階ともいえる昭和二十九年の「透谷と日本近代文学の成立」の文言である。「楚囚之詩」の作品論もここから始まったといつてよく、それから十年余りして、平岡敏夫も「政治小説のヴァリエーション」（北村透谷研究）としてとらえている。同時期に桶谷秀昭は、十八年の大矢との訣別から二十二年に至る心的情況に視点を据えてとらえ（近代の奈落）、その後「我牢獄」（25年）の「……我は識らず我は悟らず如何なる罪によりて繫縛の身となりしかを。」を引いて、「本当に描きたかったのは、こういう牢獄であつたらう。」（北村透谷）と、前者たちと異なる視点を提示している。北川透は「近代の奈落」にやや遅れて、「隠された主題とは、その心中の苦獄、無形の牢獄が、〈楚囚〉として定着されるところにあつた」（北村透谷・試論1）と、桶谷と近似する見解を展開している。研究者と評論家との着想や発想の違いはあるものの、いずれも作品の特質をとらえていて、それぞれに心ひかれるものがある。

そこに現れたのが橋詰静子「透谷詩考」で、その一章「うたの春―楚囚之詩」である。平岡敏夫が書評で「〈自由民権〉から自由であろうとし、ありうるとする新しい世代によって書かれた透谷論」と述べているように、斬新な視座からの詩人論、作品論が登場したのである。

「楚囚之詩」を詩人透谷の誕生とみる氏は、丹念な作品分析によって政治詩でも福音詩でもないことを論じ、「近代的自我の〈心宮内の秘宮〉の複雑なドラマを詩人として歌うところにおのれの天職を見定めようとした〈詩人透谷〉の誕生のうたであり、また、その自覚に至る過程の縷述」と、新鮮な見解を開陳している。ここに至る作品分析は、詩型に対する考察、透谷の試みた表現の特質を探究するところから始まる。そして、その内部構造を緻密に分析し、「〈音信〉のモチーフ」という視点の導入により「余」の自由願望に迫り、回心のもつ詩的意味を探って、作品に「絶対者」との

出会いの精神的ドラマ」という性格を発見し、政治的テーマをみる従前の見解を否定している。その上で、獄中死の受容という死との和解への転回の中に「余」の内部にある「〈外界〉での〈生〉を得たい」とする願望を想定して第十六節へと進み、生の願望が一挙に実現する「大団円」の意味に考察の目を向け、前述の見解に到着するのである。

これに接した十年近い前の驚きが蘇る。しかし、政治と文学という視点からの自由には違和のないものの、自由民権から自由な視点を保つとすれば当然ともいえようが、大矢との訣別と、回心前後との二回の精神的悶絶という透谷の暗黒な精神史への冷やかな目には、叙事詩、それも自己を投影し自己の定立を図る詩想の叙事詩であってみれば、表現過程にはたらく体験と表現、歴史（自己史）と表現という観点は作者の意識を衝迫するはずで、いささかのもの足らなさがある。透谷の内部では内への目と外への目が複雑に交錯しあっていて、凝視のはての詩人像は「近代的自我」に収斂させるだけでは若干の疑問がのこる。

「〈詩人透谷〉の誕生」という卓説に誘導されるものの、この作品を書いた秋、十一月には日本平和会をフレンド派の加藤万治と結成している。また、翌年のことになるが、「当世文学の潮模様」「時勢に感あり」などの評論を書いている。これらには十代における彼の体験、自己史が鋭く反映して、その文学観を形成し現実批判の視点を構築している。この点から「近代的自我の〈心宮内の秘宮〉」への出発を詩想として共にと共に、社会現実に関心をむける社会派詩人、現実批判の知性派詩人、これらを内在させての詩人の出発を詩想したのではあるまいか。近ごろ、色川大吉「北村透谷」に接し、多摩の民権家吉野泰三宛の二十二、三年にわたる書簡の発見とともに、未発見ではあるが、政治結社「北多摩郡正義派」の主宰者吉野宛に政治的な声援を送った書簡があり、これは吉野の透谷宛返書の発見によって裏づけられることを知った。この発見によって、透谷には崩壊期にある自由民権運動への関心のあったことは疑えない。

また、主題を巡って考える時、死と再生というモチーフの存在を思わざるを得ない。それは、第十四節でさきに触れたように鶯の訪れを神の恵みと感じ、鶯を妻・花嫁の化身と信じ

自由、高尚、美妙なる彼の精霊が

この美しくしき鳥に化せるはことわりなり、
斯くして、再び余が憂鬱を訪ひ来る
誠の愛の友！ 余の眼に涙は充ちてけり。

と、涙して神への篤い感謝をささげるのである。しかし、第十五節では急転、鶯を妻の化身とする幻想は崩壊し、獄舎を墓所と獄中死を受容するところに追い込まれる。

第十五

鶯は再び歌ひ出でたり、

余は其の歌の意を解き得るなり、
百種の言葉を聴き取れば、

皆な余を慰むる愛の言葉なり。

浮世よりか、将た天国より来りしか？

余には神の使とのみ見ゆるなり。

嗚呼左りながら！ 其の練れたる態度

恰かも籠の中より逃れ来れりとも――

若し然らば……余が同情を憐みて

来りしか、余が伴たらんと思ひて？

鳥の愛！世に捨てられし此身にも！

鶯よ！卿は籠を出でたれど、

余は死に至るまでは許されじ！

余を泣かしめ、又た笑ましむれど、

卿の歌は、余の不幸を救ひ得じ。

我が花嫁よ、……否な鶯よ！

おゝ悲しや、彼は逃げ去れり

嗚呼是れも亦た浮世の動物なり。

若し我妻ならば、何など逃にげ去らん！

余を再び此寂寥に打ち捨て、

この惨憺たる墓所はかしよに残して

―暗らき、空しき墓所―

其処には腐れたる空氣、

湿りたる床のいと冷たき、

余は爰こゝを墓所と定めたり、

生いきながら既に葬いられたればなり。

死や、汝何い時き來きたる？

永く待たすなよ、待つ人を、

余は汝を犯せる罪のなき者を！

妻・花嫁の化身である鶯の言葉を「愛の言葉」と聞きながら「余」は「浮世よりか、將た天国よりか……」と屈折するものの、回心の喜びに浸っている。しかし、徐々に鶯は化身でなく鳥と意識され、「余は死に至るまで許されじ」、「卿の歌は、余の不幸を救ひ得じ」の絶望感、意識の厭世的苛酷さは、神の使い、妻の化身という「誠の愛の友」幻想を崩壊させるところに追い詰める。まさに極限状態における魂の受苦というよりなく、「嗚呼是れも亦た浮世の動物なり」

と、自由への願望を断念するのである。この時、「余」から驚のみでなく、神も飛び去っていたのだろう。「愛の友」なく、神のいない孤独に晒され、墓所なる獄舎に絶望の生を送らざるをえない「寂寥」に沈められている。この「寂寥」は第九節で花嫁や壮士から分離されたあと、しばしば体験したところで、その死に勝る恐怖感、空無感に堪えられず、遂に「余は爰を墓所と定めたり」と獄中死を受容し、「待つ人」として死と対峙するものの、「余は汝に犯せる罪のなき者を」と楚囚として獄舎で死を受容するしかない己が非命に痛哭するのである。これには、透谷その人のミナとの恋愛の意志的禁欲的な断交から回心にいたる間の、精神の彷徨、深淵をのぞいた奈落体験が反映もしていよう。この体験の反映は大尾の第十六節の突如とした出獄、自由の回復にも見受けられる。

第十六

驚は余を捨て、去り

余は更に快鬱に沈みたり、

春は都に如何なるや？

確かに、都は今が花なり！

斯く余が想像中央に

久し振にて獄吏は入り来れり。

遂に余は放されて、

大赦の大慈を感謝せり

門を出れば、多くの朋友

集ひ、余を迎へ来れり、

中にも余が最愛の花嫁は、

走り来りて余が手を握りたり、

彼れが眼にも余が眼にも同じ涙―

又た多数の朋友は喜んで踏舞せり、

先きの可愛ゆき鶯も爰に來りて

再び美妙の調べを、衆みなに聞かせたり。

獄中死の受容から一転して「余」は出獄、〈自由〉の身となる。精神的に死んだ楚囚は自由な、太陽のもとでの人間に戻ったのである。その上、第四節で「獄舎は狭し／狭き中にも両世界／彼方の世界に余の半身あり」と二人の一体感を告げていた共生の友花嫁は、朋友らと迎えに來たのである。この花嫁は「自由、高尚、美妙」なる精神の象徴であり、「余」の生存に欠かせぬ存在である。かつて透谷は書簡草稿「夢中の詩人」、ミナとの二十年八月の恋愛高潮期以前のものとして勝本清一郎は推定するが、その草稿にミナの性情として「第一、優美を愛する心、第二、理想を好みたまふ事、第三、消極的を以て社界に尽さんと思ひ玉ふ事。」と述べている。それはそれとして、出獄から自由の回復へ、そして花嫁との再会、「余」は新しい自己の誕生、再生を花嫁と喜び、朋友は踏舞して祝福するのである。

この獄中死の受容という精神の死から、急転して、自由を獲得するという生の回復には、死と再生のモチーフがはたらいていよう。かつて、精神の悶絶状態のなかから一転して回心し、現世からの超脱を図った透谷であってみれば、自然なことである。第十五節の二十九行に対し第十六節は十六行、唐突な上に簡略にすぎるハッピーエンドという批評もある。しかし、橋詰静子は作劇法としての「大団円」のあり方から肯定的である。死と再生という視点からみても結論は同じである。このモチーフは死に至る道程こそ語られるべきで、再生の現在には未来にむけて暗示にとどめ、歓喜を語ればよい。聖書を持出すまでもない。かつて、恋愛から断交へ、そして回心に進んだ惨憺たる日々を手記として自分に刻印した時、透谷は断交の道筋を克明に述べ、回心はわずかに数十字にとどめている。生の回復という主題の提示、詩人の出発という終結部が唐突、簡略という印象もこのモチーフの存在を想定することからも消えてゆこう。

ところで、「大赦の大慈を感謝せり」には政治と文学の視点から殊に多く批判のあることは、「誤つて法を破り」と同

様である。ここには発布されたばかりの明治憲法にいだいた透谷の幻想のあることは事実である。しかし、色川大吉は「北村透谷」で二十年代の思想状況を視野に「中江兆民のような卓越した思想家は例外とすれば」と述べて、民権派もジャーナリズムも人民層も藩閥専制は改められると「議会開設」に期待した状況を論じている。浪漫的気質をもつ若き透谷が「議会」に期待し、憲法に幻想をいだいたとし、責められまい。透谷の作詩意識においては、獄中死の受容という臨死状態にある「余」をいかに救い上げるか、新生、再生させるか、その動機が模索されたのだろう。それが、憲法発布の大赦令にしか求められなかったことは、透谷の非力という面もあるが、大阪事件の関係者の出獄に楚囚「余」の出獄を重ねたことはごく自然な成行きという側面もある。

欠陥も多い作品ではあるが、それはそれとして、「先きの可愛ゆき鶯も爰に來りて / 再び美妙の調べを、衆に聞かせり。」と、鶯に詩人透谷の出発を告げさせるのである。「余」はまさしく透谷の分身であって、透谷は長い「苦獄」のあと、精神的自死の淵から再生し、詩人としての自己確立を「楚囚之詩」で果たしたのである。（本名・中山 渡）